

塩も光も

代務牧師 齋藤 篤

聖書 マタイによる福音書5章13～16節

¹³「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。¹⁴ あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。¹⁵ また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。¹⁶ そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

地の塩、世の光。

救い主イエスが語られた「山上の説教」において、おそらく最も有名な言葉のひとつであるかもしれません。特に、キリスト教主義学校や、キリスト教精神に基づいた団体や施設で、この聖書の言葉を掲げているのを、しばしば見かけることがあります。

しかし、その割には、私たちは「地の塩」という言葉を、どのように読み取ることができるでしょうか。「世の光」という言葉は何となく理解できたとしても、それをイエスから受け取った言葉として、私たちはどのようにその言葉を胸にして、日々の生活を歩むことができるでしょうか。有名な聖書の言葉である割には、実は、なかなか理解しにくい言葉であるかもしれません。

イエスは、ご自分のもとに集まった大勢の人々に対して、高台の斜面やふもとに座らせて、ご自分はその高台に立たれて、すべての人にその姿を見せ、そして、声が聞こえるように配慮されながら、ひとつ、そしてひとつ言葉をつむぎながら、大切なことを伝えられました。

そのなかで、多くは「あなた、あなたがたは〇〇〇である」という言葉を、イエスは用いています。本日読まれた聖書の言葉もそうです。「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」と、人々に告げておられます。では、イエスはどのような思いをもって、ご自分の話に耳と心を傾ける人々に、この言われ方をなされたのでしょうか。

ここで、私たちがとらえるべき、重要なメッセージがあります。それは、イエスは「あなたがたは、『すでに』そうされている」という「断定の言葉」として、人々に伝えているということです。「あなたがたは『すでに』地の塩とされているのだよ」「あなたがたは『すでに』世の光とされているのだよ」と、イエスは語っているのです。

それは決して「あなたがたは地の塩、世の光となりなさい」という命令をしているわけでもありませんし、「あなたがたは地の塩、世の光となることができます」という可能性についても述べているわけでもありません。「あなたがたは地の塩、世の光となるために頑張りなさい」という努力目標を勧めているわけでもありません。そうではなく、断定なのです。すでにそうされているのだということを、イエスは語られるのです。

誰が、人々を地の塩、世の光としたのでしょうか。それは、イエスが宣べ伝えている天の国、神の国を主であ

る、自分たちの神が、あなたがたをそうさせているのだと言うのです。ですから、イエスによる山上の説教というのは、いわゆる道徳の教科書でなければ、自己啓発セミナーのような、人間がいかに素晴らしい人間として生きることができるかというものを説くものではないのです。

そうではなく、あなたがたはもう、神によって幸いな者とされているのだ。神によって慰めや励ましを受けるに、十分値する存在なのだ。その延長線上に、あなたがたはすでに神によって、地の塩とされているし、世の光とされているのだという宣言が、ここになされたのです。私たちは、このことをイエスからのメッセージとして受け取ることができるのです。

のちに、イエスの話を聞いた人々は、「その教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」(マタイによる福音書7章28節後半~29節)と、イエスが語られた教えに驚き、また絶賛しています。「権威ある教え」とは、まさに「あなたがたはすでに〇〇〇と、神によってそうされているのだ」ということを断言しているというところに、その肝というものがあると言えるでしょう。

イエスの話を聞いていた人々は、朝から晩まで労働にいそしみ、決して裕福ではない状況のなかで、いわゆる律法学者やその実践者であったファリサイ人と言われる人々によって提示される、厳格な、ある意味では極端とも言える律法の解釈と実践を、生活の苦しさから守ることができず、社会的には律法を忠実に守らない連中というレッテルを貼られていたと言っても言い過ぎではない人々でした。

そのような自己肯定感すら満足に得られない人々に、イエスは「律法の本質」というものを伝えられました。御自身が「律法の完成者」として、今あなたがたに接していること、その律法の本質とは、ずばり、とことん他者のために働く神の愛、アガペーと言われる愛であることを強調します。この愛にイエスを通して触れる人々は、生きることの幸いというものを、自分自身が神から受け入れられていることの実感というものを、肌身に感じる事ができたのでした。

そのイエスが「あなたがたは地の塩、世の光である」と、人々に告げられました。塩も光も、私たちが生きるためには、無くてはならない存在です。つまり、生きるために必要とされている塩、そして光があなたがたであるとイエスが言われているというのは、言い換えれば、あなたがたはこの世の中で、必要な存在とされているのだという、イエスの宣言であると、私たちは読むことができます。社会がどんなに、あなたを必要としていないと評価し、そのような宣告がなされたとしても、神は違う。神は愛情をもってお造りになされた人間の誰もが、神にとって必要な者とされているのだということを、イエスはその権威をもって断言し、人々にそのことを伝えたのでした。

昨日、私は、荒浜・笹屋敷町内会で行われた「夏祭り」に、スタッフのひとりとして参加してまいりました。12年前の東日本大震災直後に、東北教区内に設置された「被災者支援センター・エマオ」が、笹屋敷町内に住まれる方々への復興支援と深い交流が、笹屋敷町内会の夏祭りへの協力と参加というひとつのかたちを生み出しています。今年はコロナ禍以来開催できなかった、4年ぶりの夏祭りでした。私も、かつて被災者支援センターのスタッフだった者として、そして、現在教区センター・エマオの一職員として、夏祭りに参加しました。私はやぐらの上から、音響操作を担当しました。

皆さんもご存知の通り、昨日は最高気温が35度、青空が広がり陰りのない一日でした。太陽がさんさんと降り注ぐなかで、汗が止まらない状況でした。そんななかで、祭りのアナウンスがなされます。「水分と塩分をこまめにとってください」と。

そうなのです。水分も大切ですが、塩分も大切です。着ていたシャツは確かに塩が噴き出ていました。暑さ対策には、適切に塩分も摂らなければならないことを、あらためて実感させられたのです。

イエスが宣教の舞台とされたイスラエルも、この時期は約半年間、雨が一滴も降らない季節が続きます。気

温は50度を超えることがあります。野の花が熱風ゆえに、ドライフラワーのようになってしまうほどです。日本ほど水資源が豊富ではないイスラエルの地にとって、この時期に水を確保するというのは、まさに至難の業と言えるものでした。しかし、水だけではありません。塩もそのような暑さのなかで生き抜くためには、絶対に必要なものだったのです。その塩こそ、私たちであるとイエスは言われたのでした。

ただ、イエスはこうも言われています。「塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」(13節後半)

塩気の無い塩なんてあるのだろうか。首をかしげてしまうような言葉です。当時のイスラエルにおいては、いわゆる岩塩を精製して用いていたというのが、一般的な塩の採取方法でした。「地の塩」といわれているゆえんは、そのあたりから来ていると言えるでしょう。それだけに、不純物の含まれている塩は、塩としての機能を果たすことができないということを、人々はよく知っていたのです。

不純物があれば、役立たずの塩として、投げ捨てられて、踏みにじられてしまう。イエスがこのような言葉を語られた背景には、イエスの話を聞いていた人々が現に、そのように社会から、宗教者たちから扱われていたことと大いに関係があるような気がしてなりません。

つまり、塩気のない塩とは、人間社会の一般常識や、人の持つ固定観念や好き嫌いがつくり上げるものと言えるでしょう。人間が大切にしているそのような考えが人間の価値を低め、簡単に投げ捨ててしまうような世の中であって、神は違う。神はあなたを純粋な塩としてみなしてくださっているのだと。そのようにあなたがたをみなしてくださる神が与えてくださる愛に、自分自身を浸すのです。そして、神に必要とされている者として、自分自身が肯定されていることを胸にして、今日、そして明日の一步を踏み出せるのだと、イエスは人々に語られたのでした。

だからこそ、イエスは続いて「あなたがたは世の光である」と語られます。光の役割は「明るく照らすこと」にあります。イエスは言われました。「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。」(16節)と。神によって光とされたあなたがたは、世の中がどんなにつまはじきにしたとしても、神が光としてくださったその明るさというものを、世の中に向けることが十分にできるのだよと、そう人々に語られるのです。

イエスは、続いてこうも言われました。「人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(16節後半)。この聖書の言葉を見て、私たちはこう思うかもしれません。「私たちはとても『立派な行い』などすることはできない」と。

私たちがもし、自分自身の力で塩になろう、光になろうとすれば、それ相当の努力をしなければならぬという思いになることでしょう。そして、その時に社会や他者による評価というものも気になります。簡単に「勝ち組・負け組」と、レッテル貼りされるような社会ですから、そういうあらゆるしがらみに取り囲まれながら、私たちは徐々に、自己肯定感というものが削がれ、失ってしまうことすらあるのです。

しかし、実はそういうしがらみというのは、神由来のものではありません。人間社会がつくり上げ、そして何よりも「私自身」がつくりあげるものであるのだということを、私たちは忘れてはならないのです。自分で自分自身の価値を低めてしまうのです。せっかく神が「あなたがたは地の塩、世の光である」と言ってくださっているにもかかわらずです。

私たちは、自分自身を低めることを、ときに「謙遜」と意識するあまり、聖書がたびたび語る謙遜を、自分自身を傷つけるように、自虐的にとらえてしまうことがあります。そうして、自分自身を極端に暗闇に落とし込んでしまうのです。それは、ある意味で言えば「罪の自覚」という言葉で表現できるかもしれません。確かに、神にどうしても背を向けてしまう私自身の姿に目を向けることも大切でしょう。しかし、私たちを光とし、必要な存在として見なしてくださっている神の思いをないがしろにしてまで、自分自身の基準で低めなくても良いの

です。イエスは、そのような社会環境にあって、あえて人々に語られたのでした。「あなたがたは神によって必要な者とされているのだよ」と。

祈り

私たちが地の塩、世の光としてくださった神、

私たちは自分で自分を傷つけようとしています。あなたが愛してくださる他者を低めようとしています。

しかし神様、あなたはあえて、私たちが必要としてくださるということを、イエスを通して語ってくださいました。

私たちはその言葉を受け入れ、心に染ませながら、新しい日々を歩む者とならせてください。

そうすることで、あなたの愛が世界へひろがり、あなたをあがめることをできますように。

イエス・キリストのお名前によって、この祈りをおささげします。

アーメン。